

私の橋歴書

<402>



一九六八年三月一日、広島国泰寺高校の卒業式を終えて、その日の午後、大阪大学を受験するために列車で大阪に向かった。尾道駅を過ぎてすぐ大きくきれいな橋をくぐった。尾道大橋との出会いであったが、当時はもちろん斜張橋という形式も知らず、後に、この橋に関わることになると思ひもよらなかつた。

大阪大学で四年生の研究室配属のとき故小松定夫先生の研究室を希望した。橋

は、小松研のアカデミックな雰囲気は憧れたというのが本音であった。なにしろ研究室には佐々木孝先生(現福井高専教授)、西村宣男先生(現阪大教授)、小林紘士先生(現立命館大教授)が助手でおられ、博士課程にSahara氏(在工ジプト)、崎元達郎先生(現熊大教授)、中山隆弘先生(現工大教授)、北田俊行先生(現大阪市大教授)が在籍されていた。

一九七一年当時、まだ土木では大学院博士課程への進学がそれほど多くないことであつたのに、この豪華な陣容は驚かされた。また、それら諸先輩方の研究テーマがすべて異なつていて、いかに小松先生の研究意欲が旺盛であつたかが伺える。

さて、卒業研究(阪大で

は特別研究と呼ぶ)では曲線桁橋の荷重分配のテーマを与えられた。小松先生は連続曲線桁の解析理論で有名であられ、その理論により阪神高速道路のS字橋が設計されていたが、その一端を垣間見ることができたことは誇らしく思えた。

修士課程では斜張橋の衝撃係数に取り組むことにな

師に恵まれて

神戸大学工学部建設学科

教 授 川谷 充 郎

つた。当時、大阪市では豊里大橋に続いてかもめ大橋が設計され、阪神高速道路公団では大和川橋梁および安治川橋梁(天保山大橋)が計画され、小松先生はこれらの設計に貢献されていた。斜張橋の衝撃係数に関する意識をもたれていた。

当時、既に立命館大学に移られていた小林紘士先生に動力学の手ほどきを受け

指導いただいた。有限要素法を用いて走行荷重による斜張橋の動的応答解析プログラムを作り始めた。そして解析モデルの一つとして尾道大橋があつた。解析プログラムの検証の第一段階として影響値を尾道大橋設計計算書と比較し、同じ値を得たことは大きな喜びであつた。

出来ず、模索の時が続いた。一九七九年に路面凹凸の不規則性を考慮した桁橋の走行荷重による非定常連成不規則振動解析手法を創り、これが後の学位論文の核となつた。

一九八〇年度、阪大工学部に風洞が完成した。一九七〇年に工学部が吹田地区に移転したときから工学部関連学科の先生方が文部省に要求すること十年、念願の風洞がやっと出来た。それまで、風工学に素人であつたが、取り組むことになり、また、小林先生のお世話になることになつた。

一九八五年三月から十月、文部省在外研究員として米国ニューヨークのコロンビア大学篠塚正宣先生のもとでお世話になるチャンスに恵まれた。信頼性理論を勉強し、限界状態確率に基づく荷重組み合わせと荷重係数に関する研究のお手伝いをさせていただいた。

一九八六年一月に帰国すると、その三月には小松先

生が定年退官され、十月に名古屋大学から福本先生が着任された。橋梁交通振動以外に風工学、信頼性理論に手を出して学位論文をまとめる時期を逸し、福本先生のお世話で一九八八年橋梁交通振動に関して学位論文をまとめた。また、土木学会田中賞を受賞することが出来た。

小松先生の退官以降、研究室では西村先生のご配慮のもとで研究費の苦勞もせず、自由に研究させていただいたことは非常に感謝であつた。

一九九九年四月に神戸大学に教授として赴任して、約二年になる。これまで師に恵まれてきたことに感謝しつつ、これからは橋梁交通振動・風工学・信頼性理論の面白さを神戸大の学生に伝えていきたい。

次回は信頼性の研究分野でお世話になつてゐる関西大学の古田均教授にお願い致します。